

---

**追 悼      池上二良先生**  
**Obituary      JIRO IKEGAMI**

---

## 池上二良先生と北方言語への思い

津曲敏郎

### 北方言語研究のパイオニア

本会特別顧問であられた池上二良先生（北海道大学名誉教授）には2011年7月15日にご逝去された。1920年5月15日のお生まれであったから、91歳をふた月過ぎたところであった。「世の常としていつかこの日が来ることは考えていましたが、やはりまだまだだと思っていました」とは、先生ご自身が永年のウイльта語研究の協力者を失ったときに寄せたことばである（池上二良1986「佐藤チヨさんへの告別のことば」『北海道の文化』54）。ここ数年来、お身体が自由がきかなくなり、記憶やことばさえ思うにまかせなくなりながらも、やはりまだまだわれわれのことを見守っていてくださる、という気持ちが私の中にもあった。心の支えは、失ってみてわかるものだと実感した。

先生の生前のご意向を受けて、ご葬儀はほとんどご家族だけの簡素なものだったこともあり、親交のあった方たちや北大言語同窓生から後押しされるように、「偲ぶ会」を企画した。と言っても、ゆかりの人たちが集まって思い出を語るだけでは、先生に喜んでもらえないような気がしたので、追悼シンポジウムと合わせるかたちにした（2011年12月17日「池上二良先生追悼シンポジウム 北方言語研究の歩み」北海道大学文学研究科北方研究教育センター主催）。シンポジウムではまず、「北方言語研究の最前線」として、日本における北方言語研究のパイオニア的存在であった先生が播いた種が着実に育ち広がっていることが、教え子ら研究者4名の発表によって示された。続いて「池上先生の北方言語研究」として、先生の業績の紹介と評価が4つの研究の柱に分けて行われた。すなわち「満洲語学」、「ウイльта語学」、「ツングース諸語比較研究」、そして「アイヌ語その他の北方諸語研究」である。それらを含むシンポジウムの概要については別途刊行を予定しているので（『北方人文研究』5号 池上二良先生追悼記念号、北海道大学文学研究科北方研究教育センター、2012年3月刊行予定）、ここでは、不肖の弟子にとって忘れがたい先生の面影からいくつかの場面を紹介したい。

### 北大での講義

初めて先生のご講義に接したのは1971年、文学部の大教室での「言語学概論」だっ

た。ノートを小脇に入れて来られると、いきなり「では書いてください」と言って、読み上げ始めた。「人間は非常に古くから自らの言語に関心を抱いていた…」と始まるバベルの塔の逸話からそれは始まり、そして延々と続いた。いつまで書き取るのだろう、とだれもがいぶかしく思いながら、やがてこの講義は時間いっぱいこうして書き取るらしいと気づき始めた。「口述筆記」という古めかしいスタイルで押し通した、おそらく(全国的にも?)最後に近い講義だったのではないだろうか(1984年の北大退官までこのかたちは続いた)。大学紛争は治まりかけていたとはいえ、さすがに文句を言う学生もいたが、先生の決して威圧的ではない、むしろ訥々とした語り口には、いつしか耳を傾け必死にペンを走らせる不思議な力があった。

もちろん先生の他の授業はこうではなかったが、余談・雑談は少なかった。余談めかしておっしゃったことの中にも、普遍的な真理が込められていたように思う。たとえば満洲語の朝鮮字文献を扱ったご自分の研究を紹介しながら、「過去の言語の音価を知るうえで外国人の記述は重要だ」とか、同じく満洲語の動詞不規則活用にあふれて、「不規則形というのは往々にして古い形を反映している」などと、さりげなくおっしゃったことが印象に残っている。あるとき、言語学(だったか学問だったか)をやるうえで大切な3つのこと、という話をされた。「第一に忍耐力、第二に獨創性」と聞いて、どちらもなさそうな私は「第三」に望みをかけたが、「それは金だ」という先生のことばに耳を疑った。「金があれば本が買えるし、勉強のための時間もとれる」という説明を聞いて、たまにアルバイトの金でも入れば仲間と飲んだり遊んだり貧乏学生としては、おおいにわが身を恥じた。それと同時に、先生の一見世間離れしているようで、実は一徹にして合理的かつ現実的な面を垣間見たような気がした。

## サハリンへ

先生は文献研究とフィールドワークの両方をきわめた研究者だった。ツングース諸語の研究を志した学生時代、生きた口語にふれることは不可能な状況だった。文献による満洲語研究は口語を知る手がかりであり、当時わずかな文献から知られる他のツングース諸語との比較が常に念頭にあった。やがて、戦後間もなく樺太から移住したウイльта語の話者との出会いを果たし、以後40年にも及ぶ北海道でのフィールドワークが始まる。その文法記述の精緻さは網羅的・徹底的なあまりに、ご本人をして「だれにもわかってもらえないのではないか」と言わしめるほど難解なものでもあった。

1990年代に入ってようやくロシアや中国での調査が可能になると、いち早くツングースの本拠地に赴いた。70歳を越えての外国のフィールドは辛くなかったはずはないが、積年の夢の実現のほうがまさったことは言うまでもない。とくにサハリンでは、ウイльта語の話者に母語の大切さを気づかせ(もちろん大切さを説いたのではなく、先生の熱意が話者の心に響いたのだ)、文字の策定から初の文字教本作成(2008年ユジノサハリンスク刊行)へと導いた。サハリンへは81歳まで通っ

ており、その学問的情熱には脱帽のほかない。

先生の訃報が伝えられたあと、2011年11月ユジノサハリンスクで行われた先住民の言語・文化に関する国際会議に参加する機会があったが、席上、ニヅフの女性が立ち上がって、池上先生への謝意と弔意を述べ、彼女の提案に応じて少数民族の方たちを含む全員が先生への黙祷を捧げた。先生がサハリンの人々からも深い信頼と尊敬を受けていたことにあらためて心を動かされながら、私もまぶたの裏に先生の面影を思い浮かべていた。

先生が功績として残されたものはあまりに大きく、一方で後進への宿題として残してくださったことに応えることも容易ではないが、どんな問題にも「先生ならどう考えるだろう、何とおっしゃるだろう」と自問しながら、北方言語研究の歩みを受け継いで行くことが、先生の学恩にわずかでも報いる道だろうと考えている。

## 池上先生の思い出

遠藤 史

池上先生に関する思い出は北海道大学2年生の後半、文学部に移行した頃にさかのぼる。新たな学生の多くに当時必修として課されていた科目に週2回の言語学概論があり、先生はこれを担当されていた。評価が厳しい科目だという噂はすでにささやかれていた。大教室の講壇に丸顔の先生が現れ、「人間はすでに非常に古くから」と最初の一節を語り出すと、受講生たちは懸命にノートを埋める。これはもちろん始まりに過ぎず、講義はひたすら口述筆記が続き、最終的には単行本のような充実したノートが完成した。これが先生の言語学概論との出会いであり、また池上先生との最初の出会いであった。

その後先生にご指導をいただいた数年間のことを思うと、ことばについて、また言語学について不注意な発言はお許しにならない真直ぐな態度が、やはり今でも想起されてくる。特に言語学演習は緊張の連続であった。言語学研究室の一角に設けられた大きなテーブルを受講者全員で囲み、英語で書かれた言語学の入門書を先生に当てられて訳読していくのが主なのだが、訳文の論理に少しでも飛躍があるとそこを突いてこられる。術語の定義も正確によどみなく言うことが求められる。日本語のことば遣いもしばしば直された。受験の英文解釈の延長のように考えていた安易な態度はたちまち見透かされ、私は毎回のように立ち往生する羽目となった。

池上先生はことばと言語学に関してはそのような真摯な先生ではあったが、一方、今になって先生のことを思い出してみると、改めて偲ばれるのは、そのような先生が時折見せたおおらかな姿である。ご研究についてはより適当な方に譲り、以下では個人的なエピソードもまじえて、後者の方に関する先生の思い出を記してみたい。

池上先生が旧制高等学校卒業までを過ごされたのは長野県松本市で、私にとって

先生は高校の大先輩にあたる。偶然郷里を同じくするというご縁もあり、ある夏休みに「帰省中に私の家を訪ねて来ないかね」というお誘いがあった（この「～かね」という言い回しは信州の方言であり、先生の口癖でもあった）。汗を拭いながら松本城を通り過ぎ、その北に広がる閑静な住宅街に入ると、やがて潇洒なたたずまいの和風建築が見えてきて、それが先生の松本のご実家であった。日本庭園に面した籐椅子に座って、冷たいお茶をいただいた。このとき言語学に関しては、おそらくまだ私には理解できなかったためだろう、ブルームフィールドをちゃんと読むようにというアドバイスをいただいた以外のことはよく覚えていない。むしろ印象に残っているのは、和服を着た先生が終始くつろいだ様子で、松本で過ごした少年時代の思い出話などをなさっていたことである。やがて夕刻となり、先生は思い立ったように「竹乃家に行こう」とおっしゃった。曲がりくねった城下町の道を先生と歩き、その中華料理店でワントンメンをご馳走になった。先生に奢っていただいたのはおそらくこの一度きりだったと思うが、竹乃家の天井の高いインテリアと、松本では名物だったワントンメンの味は、今でも懐かしく思います。

いささかの想像を許していただければ、先生は若い頃、あのように静かで上品なたたずまいの家で育ち、信州の小都市でのびのびと遊びながら、ことばに対する知的好奇心をすなおに開花させていったにちがいない。おそらくはこのことが、研究に対する真直ぐな態度とともに、時折見せるおおらかな雰囲気の説明してくれるのではないだろうかと思う。先生の松本のご実家はその後、移築と改装が行われ、今では市民の憩いの場となっていると聞く。機会があればまたあの場所を訪ねてみたい。もしかしたら、あの時の雰囲気をもう一度感じるができるかもしれない。

先生の一つのおおらかさを示すエピソードとしては、その後こんな話もされていたことを思い出す。旧制松本高校の学生だった頃、先生は夏休みの間、東京に滞在して語学講習を受け、毎年一つの外国語を習得しておられたらしい。ところが高校3年の夏は信州で過ごす最後の夏ということもあり、確かお兄様と一緒に北アルプス登山を執行することとなり、そのために東京で受講するはずのロシア語講座が受けられなかったという。この話の後に先生は決まって、このためにご自分とは他の外国語に比べてロシア語が苦手なのだと付け加えられるのが常だった。その後の先生のあげられた業績を考えれば、これはもちろん謙遜であろう。文献によるツングース語研究やその後のフィールドワークのことを考えれば、ロシア語が苦手であったはずがない。むしろこの話で面白いのは、ロシア語の勉強の機会を逃すかもしれないことを重々承知しながら、それでも北アルプスに登りに行ってしまった先生の行動力である。そしてその先生のご判断は正しかったと思う。この夏を最後に先生は信州を去り、大学へ、やがて日本全国へ、そして世界へとその活躍の舞台を広げていかれたのだから。

和歌山に就職してからは先生とお会いすることも少なくなりましたが、池上先生の退官前の最後の言語学概論を受講した妻と共に札幌を訪ねた折、先生のところにお伺いする機会があった。ご自宅の中二階で、やはり和服を着た先生は言語学

大辞典のツングース言語語地図の原版を見せてくださったり、クレイノヴィチのユカギール語の研究書を紹介してくださったりした。英語論文を書く際に先生はどのように冠詞を使われているかと質問すると、「君、そりゃ、出鱈目さ」などとおおらかな答えをされたりした。冠詞の用法より、論文それ自体の内容が先なのだ指摘してくださったのであろう。

「ユカギール語の調査研究を一層お進めください」一少し力の弱くなった文字で書かれた年賀状をいただいてからもう何年になるだろう。その言葉に十分応えられていない私に、先生はきっと「ちゃんと勉強してるかね」とおっしゃりたいにちがいない。

## 池上二良先生主要著述目録

山田祥子 作成

全著述の目録は、『北方文化研究』17:i-xv (1985) に1946年～1984年4月、『札幌大学女子短期大学部紀要』17:v-viii (1991) に1984年5月～1990年の分が収載されている。それ以降の分を含む完全版は、『北方人文研究』5 (池上二良先生追悼記念号、北海道大学文学研究科北方研究教育センター、2012年3月刊行予定) に掲載予定。

## 【編 著】

- ① 1979-1992 [編/訳解] ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 1～13. 北海道教育委員会・北海道文化財保護協会 (1979) / 北海道教育委員会・網走市北方民俗文化保存協会 (1980-1992).
- ② 1980.02 [編] 『言語の変化』(講座言語; 第2巻) 大修館書店.
- ③ 1997.02 [編] 『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会.
- ④ 1999.02 [著] 『満洲語研究』汲古書院.
- ⑤ 2001.02 [著] 『ツングース語研究』汲古書院.
- ⑥ 2002.02 [編] 『ツングース・満洲諸語 資料訳解』北海道大学図書刊行会.
- ⑦ 2002.03 [採録・訳注] 『増訂 ウイルタ口頭文芸原文集』大阪学院大学情報学部.
- ⑧ 2004.02 [著] 『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会.
- ⑨ 2007.08 [採録, E. A. Bibikova 訳] Skazanija i legendy naroda uj'ta. 北海道大学大学院文学研究科 [⑦の一部を露訳].
- ⑩ 2008.04 [E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, I. Ja. Fedjaeva と共編] *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski. Sakhalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo: Juzhno-Sakhalinsk* [ウイルタ語文字教本].

- 【主な論文】 「→」は、当該記事を(補遺付記を含めて)再録している上記編著の通し番号を示す。
- 1946.10 「満洲語の若干の文語形中の ā の表す母音に就いて」 *Tōyōgo Kenkyū*. 1: 18-24. 文求堂. → ④
  - 1949.12 「ツングース語オロッコ方言のその近隣方言間における位置」『民族学研究』14(2): 54-58. → ⑤
  - 1951.01/1954.03 「満洲語の諺文文献に関する一報告」『東洋学報』33(2): 97-118/ 36(4): 57-74 [二度に分けて発表]. → ④
  - 1953.03 「ツングース語オロッコ方言の母音音素 ö について」『言語研究』22,23: 75-78. → ⑤
  - 1953.05 「満洲語の動詞語尾 -ci 及び -cibe について」『金田一博士古稀記念 言語民俗論叢』pp.775-790, 三省堂. → ④
  - 1955.05 「トウングース語」『世界言語概説』(下) pp. 441-488, 研究社. → 一部④に再録
  - 1956.09 “The Substantive Inflection of Orok”. 『言語研究』30: 77-96. → ⑤
  - 1957 “Über die Herkunft einiger unregelmäßiger Imperativformen der mandschurischen Verben”. *Studia Altaica: Festschrift für Nikolaus Poppe zum 60. Geburtstag am 8. August 1957*. pp. 88-94, Otto Harrassowitz: Wiesbaden. → ④
  - 1959.12 “The Verb Inflection of Orok”. 『国語研究』9: 34-73, 国学院大学国語研究会. → ⑤
  - 1964 “Über zwei Vocalveränderungen im Mandschurischen”. *Oriens Extremus*. 11(1): 103-109, Otto Harrassowitz: Wiesbaden. → ④
  - 1967.03 「サンタンことば集」『北方文化研究』2: 27-87. → ⑥
  - 1968.03 「カラフトのナヨロ文書の満州文」『北方文化研究』3: 179-196. → ⑥
  - 1970.03 “Orok Kinship Terminology”. 『北方文化研究』4: 133-15. → ⑤
  - 1971.02 「ツングース語の変遷」『言語の系統と歴史』pp. 279-302, 岩波書店. → ⑤

- 1971.09 「十九世紀なかごろのオロッコ語集：サンタン語・ギリヤーク語をふくむ」『北方文化研究』5: 79-184. →⑥
- 1972.03 「ツングース語祖語の一つの動詞語尾について：\**-si* に関して」『現代言語学』pp. 651-663, 三省堂. →⑤
- 1973.03 “Orok Verb-stem-formative Suffixes”. 『北方文化研究』7: 1-17. →③
- 1975.11 「ツングース語学入門」『古代の東アジア世界』（市民講座・日本古代文化入門；第4巻）pp. 225-267, 読売新聞社. →⑧
- 1976.03 「エウエンキー語方言語彙」『北方文化研究』9: 61-92. →⑥
- 1978.01 「アルタイ語系統論」『日本語の系統と歴史』（岩波講座 日本語 12）pp. 35-98, 岩波書店. →⑧
- 1979.07 「満洲語とツングース語：その構造上の相違点と蒙古語の影響」『東方学』58: 143-153. →④
- 1980.03 「アイヌ語のイナウの語の由来に関する小考：ウイльта語の *illau* の語原にふれて」『民族学研究』44(4): 393-402. →⑧
- 1980.06 「日本語の名詞語根にあらわれる一種の母音交替の由来について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』1(3): 99-103. →⑧
- 1981.09 “Indicative Forms of Manchu Verbs: In Comparison with Those of Tungus Verbs”. 『京都産業大学国際言語科学研究所所報』2(4): 125-138. →④
- 1983.02 「言語研究と零」『言語研究』83: 1-14.
- 1984.06 「ツングースのなぞなぞ」『世界なぞなぞ大事典』pp. 47-55, 大修館書店. →⑥
- 1985.12 “The Category of Person in Tungus: Its Representation in the Indicative Forms of Verbs”. 『言語研究』88: 86-96. →⑤
- 1987.03 「ウイльта語・オルチャ語研究における B. ピウスツキ」加藤九祚・小谷凱宣〔編〕『ピウスツキ資料と北方民族文化の研究』（国立民族学博物館研究報告別冊 5）pp. 275-282. →⑤
- 1987.06 「アムール川下流地方と松花江地方：「満洲」の語源にふれて」『東方学会創立四十周年記念東方学論集』: 45-55. →④
- 1988.05/ 1989.02/ 1989.09 「満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察」『札幌大学女子短期大学部紀要』8: 1-25/ 9: 1-24/ 10: 1-26. →④
- 1988.08 「ことばの上からみた東北アジアと日本」『北海道の文化』59: 34-44, 北海道文化財保護協会. →⑧
- 1990.04 「日本語・北の言語の単語借用」『北海道方言研究会会報』30: 2-12. →⑧
- 1992.06 「北アジア言語の動詞の構造と格支配：動作対象の表示に関して」宮岡伯人〔編〕『北の言語：類型と歴史』pp. 297-313, 三省堂. →⑧
- 1993.03 “A Brief History of the Study of the Uilta Language”/「ウイльта語テキスト」/「エウエンキー語サハリン方言小語彙」村崎恭子〔編〕『サハリンの少数民族』pp. 65-71/ 73-103/ 159-170. →⑤⑦⑥
- 1994.03 「ウイльта語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38. →⑤
- 1994.07 「満洲語文語の正書法の沿革」『東方学』88: 100-110, 東方学会. →④
- 1994 “Proekt pis'mennosti ujltinskogo jazyka”. Acta Slavica Iaponica. XII: 253-258, The Slavic Research Center, Hokkaido University: Sapporo. →⑤
- 1994.02 「アイヌ語の大陸語的要素」北方言語研究者協議会〔編〕『アイヌ語の集い』pp. 159-169, 北海道出版企画センター. →⑧
- 1995.03 “The Element -n in the Indicative Forms of Verb in Tungus Languages”. 『言語研究』107: 1-15. →⑤
- 1997.12 「ナーナイ語のシカチ・アリヤン方言の無声唇摩擦音について」宮岡伯人・津曲敏郎〔編〕『環北太平洋の言語』3: 121-130, 京都大学大学院文学研究科. →⑤